

戯曲

デ
イ
オ
ニ
ユ
ソ
ス

—二人の母—

II

正
道

SEIDOU

目次

ディオニュソス 二人の母 II

全体の目次	3
-----------------	---

第4章 闖入者

登場人物	9
ディオニュソスの祭	11
森の一角	14
森のはずれ	19

第5章 ペンテウス

登場人物	27
テーバイの王城、大広間	28
アガウエ登場	31
ディオニュソス登場	34
王城の牢獄	40

第6章 バッコスの信女

登場人物	47
夕刻の山、その前景	48
山のなか	51
狂女たちの集団	52
山の前景	59

第7章 プシュコポンポス

登場人物	65
テーバイの王城、大広間	66
レルネーの底なし沼	70

ディオニュソス 二人の母 II

全体の目次

第一巻のあらすじ

第1章 神を待つ男

第2章 ポリュドーロス

第3章 カドモスとアガウエ

第4章 闖入者

第5章 ペンテウス

第6章 バッコスの信女

第7章 プシュコポンポス

第8章 冥府行き

第9章 ケルベロス退治

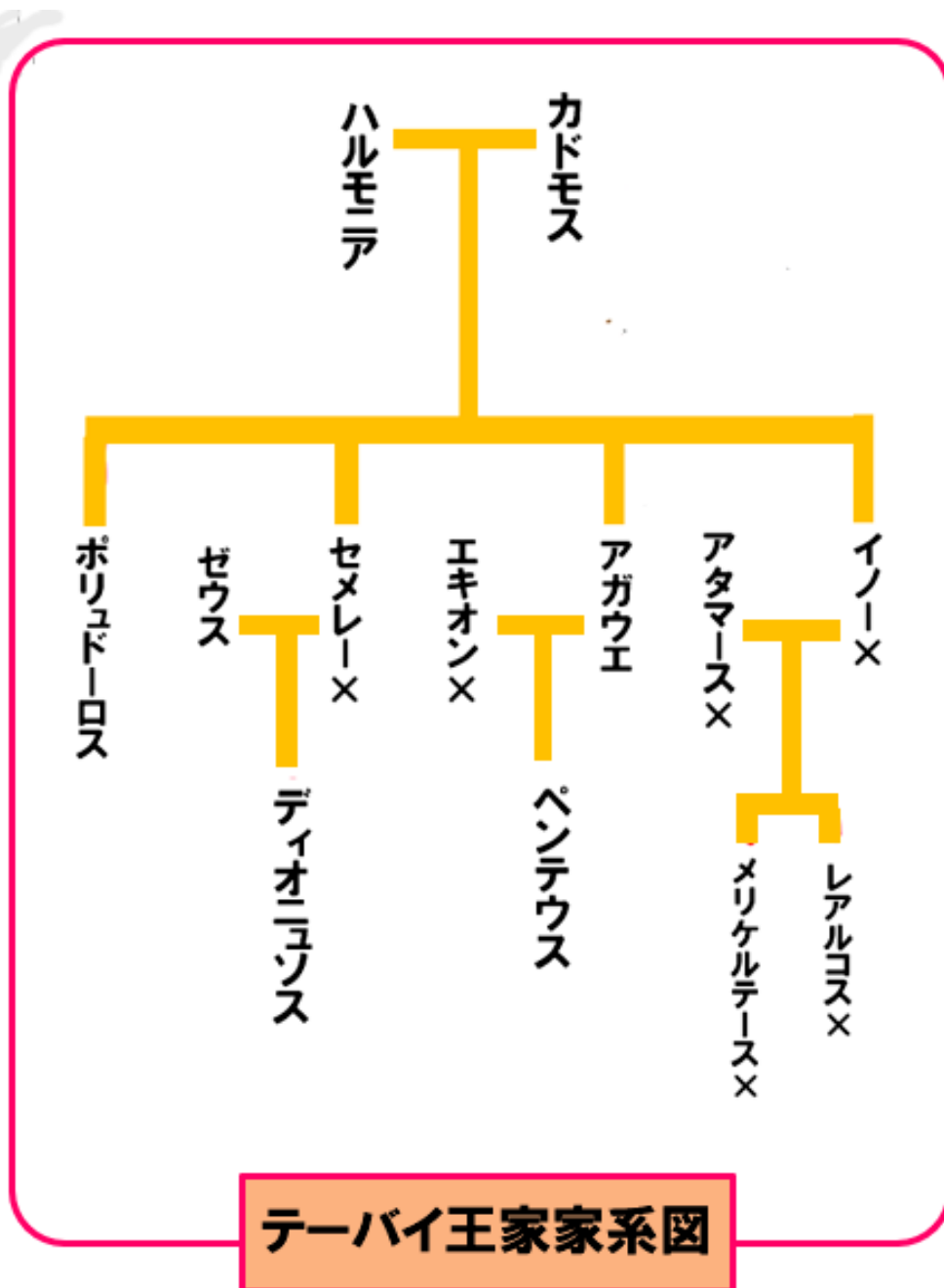
第10章 ペルセフォネー

第11章 テュオーネー



関連地図

2024-08-07 (2) .png



2024-08-07 (6) .png

第4章 闖入者

登場人物

シレノス 馬の耳と尾、足を持った半獣神。ディオニュソスの忠実な従者。

マイナスたち デイオニュソス信者の中で、いわばリーダー格にあたる四人の女性。もともとはキュベレー女神の信者であったが、女神によってディオニュソスに贈られた。

モルティ マイナスたちのうちの一人。

バッコイ デイオニュソス教の男の信者たち。

バッカイ デイオニュソス教の女の信者たち。

カドモス デイオニュソスの祖父。一昨日前からディオニュソス教の信者である。

テイレシアース 盲目の大予言者。カドモスと行動を共にしている。

クレシラス テイレシアースの従者。

アガウエ セメレーの姉。ディオニュソスの伯母。一昨日前からディオニュソスによって正気を奪われている。

ディオニュソス セメレーの子。カドモスの孫。アガウエの甥。

ポリュドーロス イノー、アガウエ、セメレー、ポリュドーロス、という四姉弟の末っ子。セメレーとディオニュソスに、肉親としての強い愛情を持っている。

ペンテウス アガウエの子。カドモスの孫。ディオニュソスの従兄弟。テーバイの王であるが、今は隣国を訪れていてテーバイを留守にしている。

ディオニュソスの祭

夜の山中で、ディオニュソスの祭が執り行われている。獣の王の一件があった二日後のことである。

ディオニュソスの神力により、森全体がブドウの蔓と房とに満ち満ちており、アルコールの匂いが、信者たちを常時的に興奮させている。

その信者たちの殆どは、オルコメノスで獲得した男女であるが、そこに今夜は、カドモス、テイレシアース、アガウエといった、テーバイ王城の住人が加わっている。

ただしディオニュソスは今夜の祭司を務めてはおらず、その代役をシレノスとモルティが仰せつかっている。

モルティ（歌う）

そろそろ三日月から、
上弦の月へと移り変わろうとする今宵、
その鈍い月光の作用によって、
我らバッコイ、バッカイの至宝が、
妖しく暗闇から浮かび上がります。
我らが宝、その名は葡萄と葡萄酒。
この森に生い茂るすべての樹木に、
濃い緑の葡萄の蔓草が絡まり、
その幾百とも知れぬ葡萄の房から、
神からの恵みの美酒が、
惜しげもなくしたたり落ちます。
風は止まって、大気は静まり、
酒は辺り一面に、その芳香を満たします。
今も甘酸っぱい葡萄の香りが、
撫でるようにして私たち包んでいます。

バッカイ

松明を灯しましょう。

燃え上がる火を眺めながら、
我らが魂をも、
赤々と燃え上がらせましょう。

バックイ

太鼓を鳴らそう。
荒いリズムで草木を揺らし、
我らが心をも、
激しく揺り動かすのだ。

シレノス

大いに踊るがよい、
今宵つどいし全ての者たちよ。
さあ始めよう、
大地に踵を突き立て、
手を虚空に振りかざして。
そうじゃ、葡萄酒を飲みつつ、
頭を揺り動かしながら。
自分の出自さえ忘れて、
森の暗がり、
どこまでも彷徨いながら。

バックイ

松明の炎の光が、
踊っている者みなを照らします。
勇壮に舞っている者、
おどけて手足を縮めている者、
飛び跳ねて笑っている者、
本当に誰を見ても楽しそう。
まるで鮮やかな幻燈のように、
次々と面白い映像が流れます。

バックイ

誰もが太鼓のリズムを、
体の芯から波のように感じている。
大きく頭を振っている者、

小刻みに四肢を動かす者、
両の手で拍子を取っている者、
その誰を見ても笑顔を浮かべている。
辺りには都の舞台のように、
次々と新しい音楽が流れている。

マイナスたち

ディオニュソス、ディオニュソス、
崇高なる葡萄酒の創り主よ。
あなたの慈愛にみちた恵みによって、
今夜も私たちの体は軽くなり、
日々の煩いは姿を消して、
体の芯から自由になっていきます。
偉大なる神に心からの感謝を。
偉大なるディオニュソス、
すべての信者があなたを讃えます。

シレノス

皆の者よ、
今夜も我らの祭が始まった。
さあ、心ゆくまで痛飲し、
心ゆくまで踊りあかし、
心ゆくまで己が心を解放させるがよい。
慈愛の心大なる神が、
お前たちの行いのすべてを、
見守り許してくださるだろう。

森の一角

大いに祭が盛り上がっていく中、森の一角では、テーバイ王城の要職者が集まって、親しげに話をしている姿があった。

カドモス 昨夜は、ただ信者たちの勢いに圧倒されるだけで終わってしまった。だが免疫がついたのか、今夜は、この祭りを本当に楽しむことが出来そうぞ。

テイレシアース（自身、木製の盃で酒を飲みながら）とにかく飲みなされ、カドモスどの。

カドモス おお、望むところだ。今日は昼間のうちに、王城から、自分の杯を持ってきたのだ。こいつをブドウの房の下にあてがえば、勝手に葡萄酒がツーッと垂れてくる。そうして杯を、なみなみと満たしてくれるのじゃ。

〔カドモス、自分で言ったとおりのことを実際に行う。それにより葡萄酒で満たされた杯を持って、テイレシアースと乾杯する〕

クレシラス それにしても、この酒という飲み物は、私たちの心身に、なんと不思議な作用をもたらすことでしょう。

カドモス まったくのう。飲めば飲むほど力強く、神の霊力が、体のなかを巡っていくようじゃ。

テイレシアース ええ、飲むほどに、体が熱くなって軽くなる。まあ、最初に飲んだときには、よほど強烈な毒かと思いましたけれども。

カドモス 毒かと思ったら薬だったわけだ。ワハハ。

テイレシアース そう、体と心の両方を自由にしてくれる薬です。これを飲んで太鼓のリズムを聞くと、私は踊らずにはいられなくなる。

クレシラス でも、ほどほどになさって下さい。お年なんですから。

カドモス（盃を眼前にかざして）人間の世界に、このような飲み物をもたらしたこと。それだけでもディオニュソスは、十分に「偉大なる神」の名に値するじゃろう。

テイレシアース ええ。

カドモス しかもこの神は、わしの孫なのだ。あのセメレーの息子なのだ。なのにわしと見たら、それを、つい二日前まで知らなかった。アガウエの嘘に惑わされて、このような素晴らしい孫がおることを、知る由もなかったのじゃ。

クレシラス 我々もそう思っていました。「セメレーさまが腹に宿したのは人間の子。しかもゼウスさまが放った雷により、母子ともども死んだ」と布告されていたからね。

テイレシアース つまり我々は、忘神のうえに、瀆神の罪を重ねていたのだ。

カドモス ……たしかにわしは、セメレーのことを好いてはいなかった。王である私にとって、国を守るという実務以上に大切なものはなかったのに、あの娘は、蝶よ花よと、夢ばかり見ているきらいがあったからな。だから現実的でしっかりとした、アガウエの方ばかりを信用してしまった。

テイレシアース むしろ盲信してしまいましたな。

カドモス むう、そうじゃ。だからわしは、あ奴の口車に乗せられて……本当のセメレーは、神の子を宿すほどにも、ゼウスさまに愛されていたというのに。

テイレシアース 要するに我々は、神の母と神の子の史実を汚して、それによりディオニュソスという神の存在そのものを消去してしまったのです。これでは十分すぎるほど、神罰を受けるに値してしまいますな。

クレシラス さしあたって我々は置いておいても、アガウエさまは、確かに神罰を受けられました。

テイレシアース（ハッとして）カドモスどの、近くにアガウエさまの気配を感じます。あなたの目に見えますか。

カドモス（少し辺りを見渡してから）……見える。少し離れた場所だが、あれは確かにアガウエじゃ。乳房を露わにして踊っておるわ。口もとが赤くなってるから、きっと生肉でも喰らったのじゃろう。もはや動物のようだ。目つきが完全におかしくなっておる。

クレシラス 昨日からああですな。

カドモス 昨日というか一昨日というか……ディオニュソス神に操られたわしが、アガウエの口を裂こうとして、娘はほどなく気絶した。そして一刻ほどで目を覚ましたアガウエは、その時にはもう十全に狂っておったのじゃ。

クレシラス というと……

カドモス 目を覚ましたアガウエは、そのまま森に向かって駆けだしていった。ひどい奇声を上げながらな。そうして翌日となり、わしが森のなかで見つけ出した時には、娘はすでに、あのような姿になっておった。

テイレシアース ディオニュソス神の信女として、生まれ変わったのです。

クレシラス そんな良いものではないでしょう。私には、重い神罰を受けられた姿にか見えません。

カドモス 恵みぶかい重罰というところなのだろう。確かに我々には「まともな」アガウエを失ったという喪失感がある。けれどもアガウエ本人は、べつに不幸そうな顔はしておらんのだよ。ほれ見てみい。

〔一同、アガウエの姿を見る〕

カドモス よだれを垂らしながら笑っておるわ。これまでは、ずっと張り詰めたような顔をしていたからな。わしにはアガウエが今、緊張から解き放たれた「いい顔」をしているようにも見えるのじゃよ。

テイレシアース それは、嘘をつき続けた人間特有の緊張ですな。そこから、めでたく解放してもらえた。

クレシラス 解放され過ぎて、人格までもが吹っ飛んでしまった。あれはやはり懲罰ですよ。

カドモス そして、そんな娘を見なければならぬのも懲罰だな。だが当然の罰だ。

テイレシアース ならば、その苦しみを忘れるためにも酒を飲みましょうぞ。騒いで踊りましょうぞ。酒は……ディオニュソス神の恵みは、このような我々にこそ必要なのです。

クレシラス（苦笑しつつ）罰を与えたもう神の恵みに縋るのですな。

テイレシアース 偉大なる神と卑小なる人間の関係とは、結局そのようなものだ。

カドモス ……じゃが、わしには一つだけ気がかりがある。そのことを考えると、酒を

飲むための手も止まってしまう。

テイレシアース ペンテウス王のことですな。

カドモス ああそうじゃ。ペンテウスが、このテーバイの有様を見たらどう思うじゃろう。

テイレシアース 駄目です。忘れなされ、忘れなされ。今はそれを考えても仕方ありません。

クレシラス そうです、そうです。今は飲んで踊るしかありません。

カドモス そうじゃな。祭の最中にふさぎ込んでいること自体が、ディオニュソス神に対する冒瀆になるじゃろうからな。

テイレシアース いかにも。では、もう一度乾杯。ディオニュソス神に乾杯。

クレシラス セメレー王女と、ディオニュソス王子に乾杯。

カドモス 乾杯。

〔三人とも、葡萄酒を飲み始める〕

森のはずれ

祭の中心からは、かなり離れた場所である。それぞれ大きめの石を椅子にして、ディオニュソスとポリュドーロスが、向かい合って座っている。ディオニュソスは自分の掌を見つめており、その掌には、小さな石の欠片が乗っている。

ポリュドーロス その石は何なのかね。

ディオニュソス ……母の墓石の一部です。

ポリュドーロス 墓石だって？

ディオニュソス ええ、一昨日のことですが、私が母の墓前で、テーバイ王家への復讐を誓い終えた時、いきなり大きな音がしたんです。

ポリュドーロス 大きな音とは？

ディオニュソス パンッ！ と母の墓石にヒビが入った音でした。何の外部作用もないのに、突如として墓石がヒビ割れたんです。じつに奇怪なことですが、ともあれ、そのときに生じた石の欠片がこれです。

ポリュドーロス それは不思議な話だ。それに、何よりその石の形が変わっている。私の目には、まるで雫のように見えるんだが。

ディオニュソス 雫……雫というよりは、たぶん涙なんじゃないでしょうか。そして私には、ここに母セメレーの意思が、込められているように思えてならないんです。

ポリュドーロス つまりセメレー姉さんが泣いているということかい？

ディオニュソス そうです。だから、私には分からなくなっていました。アガウエやカドモス、それにペンテウスに対する復讐が、本当に亡き母への弔いになるのかどうか。

ポリュドーロス ということは、君には、涙の雫が、これ以上の復讐を望まない、セメレー姉さんの願いとして感じられたんだね。

ディオニュソス まさにその通りです。でも私の一方の気持ちは「どうしてもこの復讐をやり遂げなくてはならない」という責務に燃えてもいるのです。今の私の心は、真逆の二方向に引き裂かれているかのようです。

ポリュドーロス セメレー姉さんの制止を感じながら、それでも完遂を諦められないというのだから、その復讐心は、かなり激烈で根深いものなのだろう。どうして君は、それほどにも復讐を求めるのかね。

ディオニュソス それは……

ポリュドーロス この機会に、ちゃんと聞かせてもらえないだろうか。

ディオニュソス ……私はテーバイに来る前に、オルコメノスで信者を増やしていました。

ポリュドーロス うん。

ディオニュソス そのとき、新しい信者の一人から、世にも恐ろしいことを聞いたの

です。

ポリュドーロス それは何と？

ディオニュソス テーバイの国史においては、十五年前にセメレーという姫が「不浄な男との姦通」という罪を、大神ゼウスになすり付けたことになっている。そして、その嘘を罰するゼウスの雷火によって、セメレーはその身を焼き尽くされたらしい、と。

ポリュドーロス うん。

ディオニュソス ですがそれだけではありません。というより、この先こそが重要なのです。すなわちその男は続けて「テーバイは、その瀆神の罪により没落してしまった。これを深く憂いたカドモス王は、国の立て直しのため、高邁なる孫ペンテウスに王座を譲ることにした」と言ったのです。

ポリュドーロス なるほど、それはまさしく、テーバイで徹底流布されてきた「アガウエ - カドモス史観」だ。

ディオニュソス そうです。悔しいけれどもそうなのです。これがオルコメノスまで伝わっている、テーバイの正式な国史なのです。

〔ディオニュソス、自分の手を握りしめ、憤然となって立ち上がる〕

ディオニュソス そして、その国史において母は、単に侮辱されているだけでなく、ペンテウスが栄光を受けるための、格好の踏み台にされている。要するに母は、アガウエとペンテウスに、骨の髄まで利用されているのです。

ポリュドーロス それは君からすれば、到底許せることではないだろうな。

ディオニュソス 私はテーバイに「真実の歴史」を取り戻さなければならない。ゼウス

に愛され、神の子を宿したセメレーがいる歴史をです。

ポリュドーロス うん。

ディオニュソス あるいは、すでに歪曲された歴史がすっかり固着してしまっているならば、私はそれを上書きするような「セメレーの息子の復讐史」を作らなければならない。セメレーの子ディオニュソスが、卑劣な悪漢、カドモス、アガウエ、そしてペンテウスを捻じ伏せる史実を作らなければならない。

ポリュドーロス つまり君の復讐は、すでに固定化している歴史を、根本から書き換えるほどのインパクトを持たねばならない訳だ。

ディオニュソス そうです。それだから「どうして身内のものに、そんなにも残酷なことを」と叔父上に思われそうなことも、私は平然と行ってきました。母のことを思えば、そうせずにはいられなかった。だというのに……

ポリュドーロス だというのに、復讐の半ばで墓が割れて、おそらくは姉さんが涙を流した。君は母親自身から、復讐に水を差された形になったわけだ。

ディオニュソス 本当のところは分かりません。単なる偶然だったのかもしれませんが、この涙型の石くれが、イコール私の復讐を諷めるものであるかどうか分からないのです。けれど……

ポリュドーロス けれど、何かね。

ディオニュソス 母は優しい人で、たぶん、どれほど自分が侮辱されようとも、それでも復讐など望まないくらい優しい人であったことは事実だと思うのです。

ポリュドーロス ああ……

ディオニュソス しかし、私が復讐をやり遂げないかぎり、そんな母の名誉は決して回復されない。だから私の心は、千々に引き裂かれるのです。

ポリュドーロス セメレー姉さんの優しさを汲んでやりたい君の気持ち（＝復讐の制止）。優しいセメレー姉さんの名誉を回復させたい君の気持ち（＝復讐の決行）。そのどちらもが、私にはよく分かる。二つとも君の孝行心のあらわれだ。どちらか一方を選べなどとは、私にはとても言えやしない。

ディオニュソス ああ、私はどうしたらいいのでしょうか。

〔ディオニュソスが思い悩んで頭を抱えていると、森の外側から馬の蹄の音が近づいてくる。馬数頭分が走っている蹄の音であるが、その先頭の馬にはペンテウスが乗っている〕

ペンテウス（森に入るが、ディオニュソスには気づかずに）わが王国で、猥雑きわまりない騒ぎを行っているのは何者ぞ！ われはペンテウスである。報せを受けて帰って来た。ディオニュソスなどという邪神を崇める者は、一人残らず捕らえるゆえ覚悟せよ！

ディオニュソス 叔父上、私の迷いは消えました。どうやら向こうのほうが、私を放っておかないらしい。

第5章 ペンテウス

登場人物

ペンテウス 現テーバイ王。ディオニュソスの従兄弟。隣国リヴィディアに訪問していたのが帰ってきた。

カドモス 前テーバイ王。ペンテウスの祖父。

テイレシアース カドモスの側近的な予言者。盲目だが賢者である。

クレシラス 盲目のテイレシアースを助ける従者。

アガウエ ペンテウスの母。今は正気を失ってディオニュソス教の信者になっている。

ディオニュソス セメレーの子。ブドウ酒の神。

マイナスたち デイオニュソス教の中心的な信女。

捕縛使A アガウエを捕縛してくる。

捕縛使B デイオニュソスやマイナスたちを捕縛してくる。

※ 本文中、捕縛使A Bのアルファベットの向きが一定しなくなっている。どうしても直すことが出来なかったなので、そのまま配信することにする。

テーバイの王城、大広間

時は夜明け前。松明が燃える中、捕縛されたディオニュソス教信者を前にして、王ペンテウスが演説を行う。信者たちは整然と並んでいる。この信者たちの中には、カドモス、テイレシアース、クレシラスも含まれているが、ペンテウスはまだそれに気づいていない。

ペンテウス 私はテーバイ国王ペンテウスである。隣国リヴィディアに赴いていたため、一週間ほど、この国を留守にしていた。だが、そのリヴィディアで「テーバイに変事あり」との報せを受け、急遽こうして帰ってまいったのだ。

そうして帰ってみれば、確かに怪しい風体の男女が、つまりお前たちのことだ。お前たちが、狂ったように踊っているところに出くわした。じつに破廉恥で無軌道な、理性のかけらもない踊りを踊っているところにな。

お前たちは分かっているのか。理性を失えば、人間は動物と何も変わらないのだぞ。よって、お前たちは獣なのだ。おお、おぞましき獣どもよ。まったくもって不愉快、まったくもって怪しからん。そもそもお前たちは何者なのか。

カドモス（捕縛者の列から進み出て）ペンテウスよ、我らは神ディオニュソスを讃えて踊るバッコイとバッカイだ。

ペンテウス お祖父さま……お祖父さまなのですか。

カドモス いかにも。

ペンテウス まさかお祖父さまが、このような集団に加わっているなんて信じられない。しかも隣にはテイレシアースまでもがいないではないか。クレシラス、お前も……その格好は本気なのか。いまや私は、この自分の目が信じられん。

カドモス ペンテウスよ、これは紛れもない現実だ。お前がリヴィディアに伴っていった手勢以外、テーバイの王城に住む者は、残らずディオニュソス教の信者となったのだ。我々は一昨日から。他の者たちは昨日からな。

ペンテウス 何を淡々と語っているのです、お祖父さま。仮にも先代の王であったあなたが、民を道連れにして、いきなり邪宗教に帰依するとは何事です。おお、とても正気の沙汰とは思えませぬ。

テイレシアース 口を慎みなされ、王よ。ディオニュソス神の宗教は、決して邪宗教などではありませぬぞ。

ペンテウス 何を言うかテイレシアース。宗教の聖なるか邪なるかなど、その信者の姿を見れば一発で分かるわ。裸に動物の毛皮、汚れた手、もたつく足、充血した目に上気した頬、とてもまともな人間の風体とは思えない。まるで病気にかかった野の獣だ。

クレシラス 失敬な、私たちは健康な人間です。

ペンテウス 健康であるかは知らんが、人間であるとすれば、よほど恥知らずな人間の姿だ。そして、人間を恥知らずにする宗教が邪教でないわけがない。

カドモス それは祖父である私に対する侮辱でもあるぞ、ペンテウス。

ペンテウス 正直言って、そのような格好をしている老人をして、わが祖父とは認めたくありませぬ。いや、血縁とすら思いたくない。ああ、血縁といえば母は、母アガウエはどうしました？

テイレシアース あなたの母君こそ、今では、最も熱心なディオニュソス教の信者です。

ペンテウス どういうことだ。

カドモス アガウエは、すべての雑念を捨てて、ディオニュソス神を讃えておる。

ペンテウス 意味が分かりませぬ。

クレシラス 正気を失って踊り狂っているということです。

ペンテウス そんな馬鹿な！

アガウエ登場

捕縛使Aが、ちょうど大広間にアガウエを連れてくる。

捕縛使 A 王よ、この女こそは、もっとも厄介な不審者でしたぞ。捕まえようとする、とても女人とは思えない力でもって、我々に殴りかかってくるのです。私も何か所か怪我を負わされました。それにこの姿を見てください。髪を振り乱して暴れ、口から泡を吹き出しながら叫ぶ様子は、まさに狂人のなかの狂人です。

ペンテウス 母上！

捕縛使 A 母上？ これがアガウエさまですと？

カドモス いかにもアガウエだ。ペンテウスよ、きっとお前のことも分かるまい。そのように近づくと怪我をするぞ。

ペンテウス（母を抱こうとして）母上、嘘でしょう。一体どうしてしまったのです。

アガウエ（暴れて）ウー、ウアー、ア、ア、アーッ！

〔アガウエに爪を立てられ、ペンテウスがその頬に傷をつくる〕

ペンテウス 痛っ！ 母上……何ということに。お祖父さま、どうして、このような事になってしまったのです。

カドモス 罰じゃよ。アガウエばかりではない。テーバイ王家そのものが瀆神の罰を受けたのじゃ。

ペンテウス 瀆神の罪……神を冒瀆した罪ですと？

カドモス そうじゃ。我々は神の身内でありながら、その神の母に故なき汚名を着せ、神自身に対しては、その存在自体を抹消してしまった。

テイレシアース ええ。しかも、そのような誤謬を、テーバイの国史として刻印してしまったのですから、神が私たちを罰するのは当然のことです。

ペンテウス その神とはディオニュソスという名の、今お祖父さまたちが信奉している神のことですか。

カドモス そのとおり。ゼウス神とセメレーの間に生まれた神、ディオニュソス神じゃ。

ペンテウス いやいや、その話はおかしい。だって、セメレー伯母が宿したのは、不浄下賤の男の子供だったのでしょう。私は何度も、母からそう教わりました。それ以外の話などは何も知りません。

テイレシアース それがこの国の「常識」でしたからな。だからこそディオニュソス神は、この王城ごとを罰したのです。

ペンテウス（激しく頭を振って）知らぬ知らぬ！ 今さら「教えられた歴史は嘘だった」と言われても受け入れられぬ。

カドモス ……

ペンテウス 私はディオニュソスなどという神は知らぬ。邪神じゃ、邪神じゃ、そんな神は。我々に縁もゆかりもない魔物が、我々をからかって嘘をついているだけなのだ。大体そんな、名前を聞いたこともないような神が何だというのだ！

カドモス 最近では、それなりに有名な神だったのだが、合理主義者のお前は、神々については、ほとんど関心を持たなかったからな。お前が知っているのは、せいぜいオリュンポスの十二神ぐらいのものか。

ペンテウス そんなに有名な神ならば、この私の前に連れてこい。私も見てみたい。そしてこの私が、そいつが本当の神か魔物かを確かめてやる。

テイレシアース そのような不遜な言葉を！

〔このとき大広間の扉から光が差し込む〕

ディオニュソス登場

荘重に大広間の扉が開き、曙光を背にしてディオニュソスが登場。手に縄をかけられ、捕縛使Bに連行されている形である。その背後にはシレノスならびにマイナスたちがおり、その全員が手に縄をかけられている。

カドモス（扉のほうを見て）ディオニュソス神！

マイナスたち（歌う）

見よ、我らが神は、
ほんの僅かな抵抗をすることもなく、
その柔らかく繊細な手に、
醜くささくれ立った、
灰色の麻縄をかけられました。
この下界で最も崇高なる御方は、
この下界で最も惨めな姿でもって、
この場に立ち現れることを望んだのです。
それは何よりも、王の傲慢な心根を、
薄皮一枚分も削がないようにするため。
第二に神自身が、その憎しみの情を保つため。
第三に、王に神罰を下すことを、
決して躊躇わないようにするためです。
そして、その効果は覲面らしい。
ごらんなさい、ペンテウス王は、
神が望まれたとおりの顔つきでもって、
この惨めな罪人の傍へとやってきました。

ペンテウス（ディオニュソスを見下すようにして）お前がこの辺で有名だというディオニュソスか。

ディオニュソス ……

ペンテウス 神か。偉大なる神か。

ディオニュソス ……

ペンテウス 笑わせるな。お前は人間に、しかも私の家来風情に拘束されて、ほんの僅かも動けなくなっているではないか。お前が神だとすれば、一体どれほど無力な神なのだ？

ディオニュソス ……

ペンテウス 大方お前は、催眠術でも使う山師なのだろう。その怪しい術によって、祖父や母を狂わせた、と。だが、理性堅固な私や、その私によって啓蒙されている部下に対しては、お前の術など、いっさい効かなかったのだ。それで、こうして無様に捕まってしまった。そういうことなのだ。

カドモス そんな訳はない。何かあるのだペンテウス、暴言を止めよ。罪の上塗りをするんじゃない！

ペンテウス そんな弱気だから催眠術にやられるのですよ、お祖父さまは。（ディオニュソスに）きっとお前を殺せば、祖父や母にかかっている術も解けるのだろう。が、いつでも行えるそれをする前に、術師よ、少しばかり話をしてみようではないか。私も、自分自身を神と称する者と会うのは初めてだからな。それなりに興味がある。まずはお前の素性を言ってみろ。

ディオニュソス 私は、テーバイの王女セメレーとゼウスとの間に生まれた、神の子ディオニュソスだ。

ペンテウス フフ、それが本当ならば、私とお前とは従兄弟同士ということになる。で

は従兄弟のよしみだ。もっと親しく尋ねてやろう。(ディオニュソスの髪に触れながら) ディオニュソスよ、どうしてお前は、よりもよってセメレーなどという「あばずれ」を母と呼ぶことにしたのだ? あの女は、自ら下賤の男と通じたくせに、それをゼウス神の所業であると騙った女なのだぞ。

カドモス バカが、それが嘘だと言っておるのだ。それはアガウエが騙った嘘なのだ!

ペンテウス 何が嘘なものか。見るがいい老人よ、いま私は自由で、ディオニュソスは縛られて自由を奪われている。誰が見ても私が強者で、ディオニュソスが弱者だ。そして歴史というものは、つねに強者が作るものなのだ。だとすれば、真偽を査定する前から、私が言っていることが歴史的真理ということになるのではないか。

テイレシアース この賢しきな大馬鹿者が……おお、人間とはこんなにも愚かしい生き物なのか。私には、どうして神がこのような姿で現れたのかが分かった。ディオニュソス神は、ペンテウスを「罰せられて当然の存在」に仕立て上げようとしているのだ。

ペンテウス 世迷い事はやめよ、テイレシアース。予言者などというものを、私はもともと、少しも信用していなかったのだ。

テイレシアース その予言者が今こそ予言しよう。テーバイはもう終わりだ。終わりだ、終わりだ!

ペンテウス 外野は放っておこう。ディオニュソスよ、面白いから聞かせてくれ。そんな惨めな格好をしていても、お前は自分を「神の子」だと言い張るのか。

ディオニュソス そうだ。私はそれだ。

ペンテウス 分かった。もう十分だ。こいつは狂人なのだ。自らを神と思い込んでいる誇大妄想狂なのだ。こんな惨めな境遇に落ちてもなお神を自称できる、重症の誇大妄想狂なのだ。

カドモス 真実の神が、ただ自分を神だと言っているだけだ！

ペンテウス そうではない。こいつは今、神々に対する不遜を堂々と口にしたのだ。これだけでも十分に死刑に値する。よって捕縛使よ、この邪魔くさい、うっとうしい狂人の首を切ってしまえ！

捕縛使 B 御意。

〔捕縛使 B が、ディオニュソスの首に向かって刀を振り下そうとする。しかし振り出しの姿勢のままで体が硬直してしまい、何も出来なくなってしまう〕

ペンテウス どうしたのだ？

捕縛使 B 腕が動きませぬ……

ペンテウス なぜ動かない？

ディオニュソス 人間に神を殺せるはずがないからだ。

ペンテウス 何だと？ 貴様、いつのまに縄を！

〔見れば、ディオニュソスの手を拘束していた麻縄は切れ落ちている。ディオニュソスばかりでなく、信者すべての縄が切れている〕

ペンテウス 何だこれは！ どういうことだ！

ディオニュソス 神が、人間の想定をこえた所業を為すのが不思議か？ ペンテウス、いや従兄弟のお兄さん。

ペンテウス　これが催眠術による幻覚なのか？

カドモス　幻覚などではない。すべて事実。ここに神の力が顕現しているのだ。

ペンテウス　……たしかに幻覚とするには、あまりにも確たる現実感がある。ディオニュソス……では、あなたは本当に神なのか？

〔ディオニュソス、いまや体から神々しい光を放ちながら答える〕

ディオニュソス　フフフ、同じ答えを言わせるな。そうだとはいったではないか。

ペンテウス（ディオニュソスの光に威圧されながら）私を殺すのですか？

ディオニュソス　今すぐには殺さない。王城の牢獄で、まずはお前に「罪人としての孤独感」を味わってもらうことにしよう。私の母が、一国の歴史のなかで、最大級の罪人として扱われたようにな。そのあとで「受けて当然の罰」としての死を与えてやる。

ペンテウス（泣きながら）許してください……

ディオニュソス　手遅れだ。お前は神前にあって傲慢でありすぎたのだ。

ペンテウス　……

ディオニュソス　しかし、せめてもの慈悲だ。これから始まる、孤独極まりない時間をやり過ごすために、お前に話し相手をくれてやろう。シレノス、夕刻まで（＝処刑まで）の間、こいつの傍にいてやるがよい。

シレノス　かしこまりました。

ディオニュソス 他の者たちは山に戻れ。新しい仲間となる、ペンテウスの手勢も連れてな。そして夕刻から始まる祭に備えて、ゆっくりと体を休ませるのだ。ただ……カドモスよ、あなたはどうかさる？

カドモス もはやペンテウスに、猶予や赦免の余地がないことは分かっております。しかしペンテウスが、私のかわいい孫であることも事実。さすがに孫の末路を気にしながら、心身を休ませることなどは出来ませぬ。

ディオニュソス まあ、そうであろうな。

カドモス ですから私は、せめて王城のなかで、これからの成り行きを見守っていることにしましょう。それが祖父としての、最低限の務めではありますまいか。

ディオニュソス そうか、あい分かった。では他の者たちよ、山に戻るぞ！

〔一同退場する〕

王城の牢獄

椅子に座っているペンテウスが、悩ましげに頭を抱えている。その姿を、少し離れて長椅子に座ったシレノスが眺めている。シレノスは肘をついて、なかば長椅子に寝転がっているような姿勢である。

ペンテウス　ご老人よ、私はもうすぐ死ぬのだな。

シレノス　そうですね、そのようになりますかな。

ペンテウス　どうして、こんな事になってしまったのか。

シレノス（姿勢を正して）王よ、あなたは神に対して不遜すぎました。

ペンテウス　確かにそうだ。……だがご老人、人間が、自分の身内に神がいるなどということを信じられるだろうか。しかも、それまで軽んじてきた身内の子供としてなど。

シレノス　そういえば「預言者は故郷では歓迎されない」と誰かも言うておりましたな。

ペンテウス　いずれにしても、私は死にたくないのだ。

シレノス　もう、そんなことを考えるのはおやめなさい。あなたの生殺与奪の権利を握っているのは、もはやあなたではないのです。それを握っているのはディオニュソスさまなのです。よって、あなたが「自分の命をどうこうしたい」と考えることは、実質的には全くの無意味です。

ペンテウス ではそなたは、私に「黙って死ね」と言うのか。

シレノス 私は「神のまえに全てを投げ出してしまいなさい」と言っているのです。あなたの命も思案も運命もです。そうやって、神の大いなる配慮に、自分の存在を委ねてしまうのです。そうすれば安心が得られるでしょう。

ペンテウス それで私の命が助かるというのか。いや、ディオニュソス神は、私を許したりしない。あの神は、私に対して、殺人的な怒りを向けていたのだ。

シレノス 許すも許さぬも神の勝手。あなたは、ただ自分の卑小さを認めて、その詰まらぬ人間心のすべて全てを捨て去ればいいのです。それだけの話です。どうせあなたには、神の慈悲を信じる以外のことは出来ないのですから。

ペンテウス デイオニュソス神が、私に対する慈悲心など、持っているはずがない。

シレノス そのように断言するのは早計です。だって、あなたに「私」という話し相手を与えたこと自体が、すでに一つの慈悲なのですから。

ペンテウス こんなものが慈悲だというのか……

シレノス ですから、神の心を人間心で推しはかる愚を犯しますな。神の心は複雑怪奇なもの。怒りの顔の下に、許しの顔を隠していることもあります。

ペンテウス いや、そんなこと信じられない。きっと、こんな話をしても無駄なのだ。ああ誰か、誰か俺を助けてくれ。俺は王なのだ。願いを叶えてくれれば何でもやるぞ。

〔牢獄の扉が開き、そこからポリュドーロスが入ってくる〕

ペンテウス 誰だ！ 死刑の執行人か？ それとも俺を助けてくれる救世主か。

ポリュドーロス どちらでもない。三日ぶりに王城に来たポリュドーロスだ。ペンテウスよ、お前のことを聞いて駆け付けたのだ。父上（カドモス）にも、是非お前に会ってやってくれと頼まれた。

ペンテウス 叔父上ですか！ 格好が格好なので分からなかった。しかし、その格好をしているということは、あなたもディオニュソス教の信者になったのですね。

ポリュドーロス ああ、そうだ。だが教祖である以上に、ディオニュソスは、私にとって「可愛い甥っ子」ではあるけれども。なにしろ、あのセメレー姉さんの子なのだからな。

ペンテウス ああ、私も、あの神がセメレー叔母さんの子だと知っていたなら……

シレノス それを認めるための機会は、ちゃんとあったではないか。それを頭ごなしに否んだのは王自身だったはずだ。

ペンテウス うるさい、この役立たずめが。それより叔父上、ここにもあなたの「可愛い甥っ子」がおります。しかも絶望的な苦境に陥った甥っ子がです。そうした中に叔父上が現れたのも天祐。どうか私を助けてくださいませ。私をここから逃がしてくださいませ。

ポリュドーロス 逃げるだって？ 神から逃げようというのか？

ペンテウス ほかに私が生き残れる道はありませぬ。

ポリュドーロス だが、神の手が届かない場所があるだろうか。

シレノス あるはずもない。

ペンテウス それでも私は逃げきってみせます。生きるために。

ポリュドーロス 仮にそれが成功したとして、では残されたアガウエ姉さんや父上はどうするのだ。お前には、母親を見捨てていくことが出来るのか。父上は、お前を最後まで見守るために、この王城にいるんだぞ。

ペンテウス たしかに二人とも、私とずっと一緒にいてくれた人たちです。ですが逃走するには足手まといになるでしょう。とくに母上は……もうどうしようもありません。気が狂っていますから、精神的には、もう死んでいるも同然です。

ポリュドーロス ひどいことを言う。これを聞いたら、姉さんもさぞかし悲しむことだろう。ここにはディオニュソスとセメレー姉さんのような、あの固い母子の絆は、ほんの欠片ほどもないのだ。

ペンテウス 仕方がないではありませんか！ だって叔父上、私は母上に嘘を吹き込まれて、それを信じたがゆえにこそ、事ここまで至ったのですよ。

ポリュドーロス たしかにそうだ。だがペンテウスよ、それは姉さんが、お前を王にしたい一心でついた嘘なのだ。

ペンテウス 余計なお世話です。実際、それが余計なことだったのが、いま証明されているではありませんか。ああ、いっそ、あんな人が私の母親でなかったなら！ 本当に腹立たしい。どうして私の母親はあの人だったのだ！

シレノス（独白）ああ、やはりか。やはりペンテウスは母親を呪った。ディオニュソスさまが言ったとおりだ。では、お言いつけどおりに、これを使うとしよう。

〔背後から小瓶を取り出して蓋をあける〕

シレノス 王よ、ちょっとこれを吸い込んでみなされ。気持ちが落ち着きますぞ。

ペンテウス なんだ、いい匂いでもするのか。（鼻を近づける）

シレノス キュベレーさまから頂いた大地の芳香。つまり強烈な媚薬です。

ペンテウス ぬ……なんだ、急に変な気持ちになってきたぞ。頭に昇っていた血が、すべて下半身に集まっていくようだ。ううむ、こんな時なのに竿だってしまう。

ポリュドーロス シレノスどの、一体なにをなさったのです。

シレノス ディオニュソスさまからの命令なのです。ペンテウス王には、これよりディオニュソス教の信者となってもらいます。アガウエと同様、正気を失ってもらう形で。

ペンテウス（白目を剥きながら）おお……女だ。私に女をあてがえ。これは王命である。この勃起した竿を収納するための穴をあてがえ。

ポリュドーロス なんと品のない……

シレノス（ペンテウスに）穴ですか。分かりました。いま穴をご用意いたしますので、どうか一緒に来てください。山の中には、若い女たちがいくらでもおります。

第6章 バッコスの信女

登場人物

ペンテウス テーバイ王。アガウエの息子。強烈な媚薬によって、いまや正気を失うほどのサカリがついている。

ポリュドーロス ペンテウスとディオニュソスの叔父。ディオニュソス教の信者。

カドモス 前テーバイ王。ペンテウスとディオニュソスの祖父。アガウエ、ポリュドーロスの父。ディオニュソス教の信者。

シレノス デイオニュソスの従者。老賢者的な半人半獣の牧神。

ディオニュソス ブドウ酒の神。ペンテウスの従兄弟。

アガウエ ペンテウスの母。カドモスの娘。正気を失ったディオニュソス（バックス）の女信者。

侍女A・B・C・D アガウエに仕える女たち。全員正気を失っているが、正気を失う前からテーバイの王城でアガウエに仕えていた。

マイナスたち デイオニュソス教の中心的信女。神の心を反映した歌を歌う。

※ 侍女A・B・C・Dのアルファベットの向きが一定しない。どうしても直せないため、そのままの形で配信することにする。

夕刻の山、その前景

ペンテウスの前には鬱蒼とした森が広がっており、その森の中には大勢の人の気配がある。むろんディオニュソス教の信者たちである。ただし、まだ祭は始まっていない。今は祭の前の、やや活気を帯び始めた時間帯。ペンテウスは、そうした森の中に入っているようにしている。

ただしペンテウスは、その両腕を、ポリュドーロスとカドモスによって掴まえている。そのために彼は、自分が望むようには進むことが出来ない。もっとも、それでもなお、叔父と祖父を引きずるような勢いを保っているが。シレノスが三人のあとを付いている。

ペンテウス（もがきながら）放せ、放せ、もう我慢ができない。汁がこぼれそうなのだ。女だ、女だ、メスだ、メスだ。交尾だ、交尾だ、交尾だ、交尾だ！

ポリュドーロス もはや発情期の犬同然だ。

カドモス これが本当に、あのペンテウスなのか。

ペンテウス 放さないと嘯みつくぞ！

シレノス もうよい。二人とも王を放しなされ。

〔腕を解放されたとたん、ペンテウスが森に向かって駆けてゆく。ただし四つ足で〕

ペンテウス ガウ、ガウガウガウ！

カドモス（ペンテウスを見送りながら）アガウエに続いてペンテウスまで、こういう悲しい姿を見ることになるとは。

ポリュドーロス 死ぬところを見るよりはいいのかもしれないが……

シレノス もし王が、ディオニュソスさまの前に、身も心も投げ出していたならば……決してこういう結末にはならなかったのじゃ。もしそうしていたならば、ディオニュソスさまは、王を許そうと言っておられた。

カドモス 許そうと……

ポリュドーロス だがペンテウスには、それが出来なかった。

シレノス しかも王は、実の母親を呪った。ディオニュソスさまは、アガウエを憎みきれないと言っていたのに。

カドモス 憎みきれないですと！ 本当ですか？

シレノス いかにも。つまりこうじゃ。今回のテーバイ国史の歪曲は、とどのつまり、子を思う母の気持ちが原因となったもの。たとえ歪んでいたとしても、そこには、子供に対する母の愛がある。

カドモス アガウエの愛……

シレノス それはディオニュソスさまにとってみれば、セメレーさまが自分に注いでくれたのと同じ「母の愛」じゃ。尊崇すべきものじゃ。それを思うと、どうしてもアガウエと、そのアガウエが愛したペンテウスを憎み切ることは出来ない、と。

ポリュドーロス　だがペンテウスは、ためらいもせず母を見限り、迷いもせず母を呪った。

カドモス　そうなのか。

シレノス　それはディオニュソスさまにとって、到底許しがたいことだった。が、その反面、それはディオニュソスさまにとって、充分予測がつくことだった。だからディオニュソスさまは、わしに予め渡しておいたのじゃ。人の正気を失わせる強烈な薬を。

カドモス　ペンテウスは、これからどうなってしまうのか。

ポリュドーロス　おそらく、アガウエ姉さんと同様の暮らしをするのでしょう。ある意味で、親子仲良く生きるのです。

カドモス　ディオニュソス神による、恵みぶかい罰というやつか。

山のなか

木々が生い茂る山の中。ディオニュソス教の信者によって松明が焚かれ、その赤い光がメラメラと点在している。また、ディオニュソスの祭りを控えた信者たちが、森のいたるところで体を休ませている。

ペンテウス（四つ足で走りながら）ウー、女、女、メス、メス、メス！

〔ペンテウスの面前にディオニュソスが現れる。そこに立っていたらしい〕

ディオニュソス（寂しそうに）この先に女がいるぞ。

ペンテウス そうか、女がいるか、よし！（走り去る）

ディオニュソス（振り返りもせず）お前がそのような姿でここに来たということは、つまり母親を呪ったということだな。残念だよ、従兄弟のお兄さん。

狂女たちの集団

ペンテウスは猛烈な勢いで森を走り、ついに女たちの集団を見つける。その集団の中心になっているのは、母アガウエである。そのアガウエの周りに四人の侍女たちがいるが、みなディオニュソスによって正気を奪われている。すなわち全員が幻覚を見ている。

ペンテウス おんなあ……

アガウエ（侍女たちに）皆さん、茂みの中から、何かが首を出しましたよ。

侍女 A 動物のようですわね。

アガウエ 犬だわ。（ペンテウスに）おいで、おいで。

〔ペンテウス、アガウエに近づいていく〕

ペンテウス ハアハア、姦らせろ、女……

アガウエ 舌を出して近寄ってきますよ。人懐こい犬だわ。かわいらしい。

侍女 B やだウッフ、この犬ったら、せっせと腰を振っていますわよ。

侍女 A オホホ、本当、アガウエさまを、メス犬だと思っているのですわ。

ペンテウス 早く……早く足を上げろ！

アガウエ だめよ犬のくせに。ちょっとワンちゃん、どんな顔してサカってるのか、私にちゃんと見せてごらんなさい。

〔アガウエ、ペンテウスの頬を両手で掴んで、間近でその表情を確かめる〕

侍女 B どんな顔をしてるんですか。

アガウエ（青ざめて）この顔は……だめだわ、凶暴で危険だわ。目の奥に、私への敵意が満ち満ちてる。まるで私を恨んでるみたい。このままでは、何をされるか分かったものじゃない。

侍女 A 大変！ はやく引き離さなくては！

〔侍女全員で、アガウエからペンテウスを引きはがす〕

ペンテウス（尻もちをつきながら）何をするか！ 私は国王だぞ、邪魔をする奴は死刑にするぞ！

侍女 B 大きな声で吼えているわ、怖い、怖い！

侍女 C（松明を持って）やーっ！ アガウエさま、皆さん、違いますわ、違いますわ。よくごらんなさい、これは犬ではありません。

侍女 B どういうこと？

侍女 C ほら、その吼えている口の中ですよ、よく見てください。（炎をかざしながら）大きな牙が生えています。この牙は犬なんかのものじゃありません。虎の牙です！

侍女 D 虎だわ！

侍女 A 本当だわ、いつのまに虎に変わったのかしら。

侍女 D 虎だわ、虎だわ。

ペンテウス うるさい奴らめ。もう誰でもいい、とにかく姦らせやがれ！

侍女 C 助けて、唸りながら私のほうに来るわ！

アガウエ こっちに隠れて！ この獣めが、私の侍女たちを噛み殺そうだなんて、絶対に許しませんよ。

ペンテウス（アガウエに）やはりお前か、お前が俺とやりたいのか。

アガウエ それにしても大きな虎。でも不思議と怖くないわ。むしろ私になら、この虎を倒せそうな気がする。

マイナスたち（遠くで）

われらが主、
ディオニュソスさまは、大地の夫にして、
大地はディオニュソスさまの、
とこしえに従順、貞淑な妻に他なりません。
よってバツカイ、バツコイたちも、
祈り望めば溢れんばかりの、
大地の力を、その身に賜れるのです。
真なるバツカイ・アガウエよ、
お前がその虎を仕留めると宣するなら、

私たちマイナスが、陰ながら、
かの大地母神に祈ってあげましょう。
あなたのその腕に、
巨木をも支える、土の力が宿りますように。
あなたのその足に、
草木を育む、土の活力が溢れますように。
そうして、その力によって、
みごと大虎を仕留めて、われらが主、
ディオニュソスさまへの奉納品としなさい。
きっとそれを、ディオニュソスさまも、
心から喜んでくれるでしょう。

アガウエ おお、体が熱くなって震える。この二の腕に、溢れんばかりの力が宿る。

〔アガウエ、再びペンテウスの顔を両手で掴む〕

侍女 A アガウエさま、何をなさるつもりですか。危険ですよ！

アガウエ お前たちには、あの清らかな歌が聞こえなかったのですか。いま私は無敵なのですよ。

ペンテウス ようやく始めるのだな、俺の女。

〔そう言ってペンテウスがアガウエの腰に触れるが早いか、身をかわしたアガウエが、息子の首を、自身の脇の下で締め付ける〕

ペンテウス 何をするか、放せ！

マイナスたち（遠くで）

かの神はかつて、
ティターンどもによって引き裂かれ、
貪られ、巨神たちの食餌となりました。

おお、なんという忌まわしい惨劇！
しかしながらそれは、
ディオニュソスさまの心臓であられる、
虚無が露わにされるためには不可欠な、
まさに必要必須の儀式でありました。
それゆえ八つ裂きは、主の本質をば、
象徴的に讃える奉納行事となるのです。
つきましては、バックイ・アガウエよ、
是非ここで、他ならぬ八つ裂きを、
ディオニュソスさまに奉納なさいますよう。

アガウエ 分かりました。そういたしましょう。

ペンテウス 放せ！ なんという馬鹿力なんだ！

アガウエ（侍女たちに）こうして私が首を押さえていますから、さあお前たちは、この
大虎の手足を各々で掴みなさい。そうして思い切り引っ張るのです。

〔四人の侍女たちが、それぞれペンテウスの四肢を掴む〕

アガウエ（侍女たちに）お前たちの腕には、大地から伝わる、大いなる力が宿ります。
力を込めれば、きっと虎の手足も挽ぎれるでしょう。これをやり遂げて「八つ裂き」を
ディオニュソスさまに奉納するのです。

侍女たち ああ、不思議な力を体中に感じるわ。ええい！

〔狂女たちに四肢を引っ張られているペンテウスは、その痛みの中で正気を取り戻す〕

ペンテウス い、痛い！ 何者が私にこのようなことを！（どうにか上を向いて）は、
母上ではありませんか！ 母上、何をなさっているのです！

アガウエ この期に及んでよく吼えるわ、この虎めが。

侍女A（右腕）メリメリという、筋が伸びる音が聞こえます。

ペンテウス うあ、や、やめてくれ！

侍女B（左腕）いま骨が外れましたわ。

ペンテウス 痛い、痛い、痛い！

侍女C（右足）あ、皮膚が裂けてまいりました。

ペンテウス もうダメだ！

侍女D（左足）取れた！ 股から足が抜けたわ！

ペンテウス ギャー！

〔直後、左足以外の手足も胴体から離れる〕

アガウエ よくやりました、立派ですよ。虎は息も絶え絶えです。仕上げは私がいたしましょう。みんな、虎の胴体をしっかりと持っていておくれ。

〔侍女たちが胴体を持ち、今度はアガウエが、ペンテウスの首を引っ張る〕

ペンテウス ははう……（絶命すると同時に、首が胴体から離れる）

アガウエ やった！ 首が抜けました。八つ裂きです、立派な八つ裂きです！

山の前景

辺りは真っ暗になり、信者たちが「ディオニュソスの祭」の開始を、今か今かと待っている段になっている。

しかしながら、カドモスとポリュドーロス、ペンテウスのことが気にかかって、なかなか山の中に入れない。つまり今も山の前景にいるのである。二人とも松明を持ってペンテウスの帰りを待っている。その二人から少し離れたところにシレノスがいる。

そこに、杖を持ったアガウエが、山の奥から登場。彼女の持つ杖のさきにはペンテウスの生首が刺さっている。

アガウエ（あたりを見回して）ディオニュソスさまはどこ？　こっちにいるって声が聞こえたのだけれど。ああ主なる神よ、早く私の獲物をご覧になってくださいまし。あなたに奉納するために八つ裂きにした、虎の頭でございますよ。

〔アガウエが、これ見よがしに杖を揺らす〕

カドモス　見ろポリュドーロス、地獄だ！

ポリュドーロス　アガウエ姉さんがペンテウスの首を……何ということだ。

アガウエ　あら父上、それにポリュドーロスも。

カドモス　？　……アガウエ、私たちが判るのか？

アガウエ いま松明の炎を見たらクラッとして……そうしたら二人の姿が見えました。それより見てください。私すごいのですよ、素手で虎を殺したんです。ディオニュソスさまに喜んでもらおうと思って。

カドモス お前には虎に見えたのか……おお、ディオニュソスさまは恐ろしい神じゃ！

ポリュドーロス 姉さん、ちゃんと杖の先にある首を見てください。いや違う、見ないほうがいい！

アガウエ（上を見て）だって虎でしょう……ペンテウス？

カドモス ペンテウスじゃ。お前が殺したのはペンテウスなのじゃ。

アガウエ ペンテウス？ ペンテウス！ ペンテウス！

カドモス どうしてこんなことに……なにも母親に、我が子を殺させなくとも……

アガウエ（号泣しながら）ああ、分からない、分からない！

ポリュドーロス 何という悲劇だ。

アガウエ でも確かに、あたしには敵に見えたのよ。この子が私の敵に見えたのよ。

〔アガウエが杖を放して泣き崩れる。ペンテウスの首が土の上を転がる〕

ポリュドーロス 敵……

シレノス 母を見捨てた子供は、母には敵に見えたのじゃろう。

カドモス シレノスどの、残酷じゃ。ディオニュソスさまは、あまりにも残酷じゃ。

シレノス うむ。

〔カドモスがペンテウスの首を拾い上げ、その生首と対面しながら話す〕

カドモス 少なくとも、わしにとっては、ペンテウスは可愛い孫じゃった。ペンテウスのおかげで、わしは己の威厳を保つことが出来た。

アガウエ（何も聞かずに土を叩いて）ああ！

カドモス 老いぼれたわしが誰かから馬鹿にされたとき、ペンテウスは言ったものだ。その怪しからん奴は誰です、今すぐ私が懲らしめてやりましょう、と。のおかげで、わしを馬鹿にする奴はいなくなった。

ポリュドーロス ええ、そうでしたね。

カドモス ペンテウスは、そんなにも祖父思いの優しい孫だったのじゃ。可愛い孫だったのじゃ。なのに、こんなにも無残な姿になってしまうなんて。

アガウエ（泣きながら）死にたい……

カドモス そんなことを言うな！ もう身内が死ぬのはたくさんだ。セメレーも、イノーも、ペンテウスも死んでしまった。みんなわしよりもずっと若いのにだ！

〔カドモスが生首をポリュドーロスに渡す。そのあとアガウエの手を握って、彼女を立たせようとする〕

カドモス さ……酒だ。アガウエ、山のなかに入って酒を飲むぞ。酒を飲んで全てを忘れるのだ。それしか我々に出来ることはない。こうなってしまうば、人間を救ってくれるのは酒だけじゃ。

ポリュドーロス（生首に）ペンテウス、お前も飲むか。

カドモス 行くぞ、ポリュドーロスにアガウエ。それからペンテウス！

〔カドモス、アガウエ、ポリュドーロスが山の中に消えていき、シレノスだけが、その場に残される〕

シレノス たしかに残酷じゃな。だがディオニュソスさまも、この結末を決して喜んではおるまいで……わしには分かる。

〔言いながら山の中に入っていく〕

第7章 プッシュコポンポス

登場人物

ディオニュソス ブドウ酒の神、セメレーの息子。

ヘルメス・トリスメギストス 三倍も偉大なヘルメス。世界の裏側から歴史を掌っている至高の神。トリスメギストスと表記。

オルフェウス 詩人にして歌の名手。豎琴に合わせて吟唱する。トラキアで妻を亡くし、その妻を取り返すために冥府に降ろうとしている。

テーバイの王城、大広間

真夜中。王城の裏に聳える山では、今もディオニュソスの祭が執り行われている。祭の司となっているのは、シレノスとマイナスたちである。

いま劇の舞台となっている大広間に人影はない。王城に住んでいた全ての人間は、ディオニュソス教の教徒となって、山での祭りに参加しているからである。ただし祭の喚声や楽器の音などは、この王城にも届いてきている。

ガランとした大広間には、神ディオニュソスだけがいる。彼は、かつてカドモスが座っていた王座に、力なく腰かけている状態である。

ディオニュソス（不機嫌そうに独白）ペンテウスは死んだ。母であるアガウエの手にかかって死んだ。そのアガウエもまた処罰された。これで私の目的はすべて果たされた。なにしろテーバイ王国そのものが、滅亡したようなものなのだからな。すべては終わり、私の気は済んだ。が……

〔ディオニュソス、王座から立って身を振る〕

ディオニュソス 虚しい、虚しい、胸に穴が空いたかのように虚しい。なぜか、おお、私に分かっている。こんなこと母上は望んでいなかったからだ。（手に握っていた涙形の石片を掲げながら）あの優しい人が、自分の一族が滅びることなど望むわけがない。こんなことをしても、少しだって母上を幸せにしたりはしない。（再び石片を握りしめて）私がやったことは、ただ自分を慰めるだけのもの。自己満足、自己満足、それだけのことなのだ。

〔ディオニュソス、ついに手で顔を覆って泣き出す〕

ディオニュソス しかし……しかし、私はそれをしない訳にはいかなかった。どうしても復讐の決行を避けられなかった。母上の名誉回復を求めれば、どうしたって仕方のないことだったのだ。たとえ母上がそれを望んでいなかったとしても……母上、母上、私はどうすれば良かったのでしょうか。いや、これからどうすれば良いのでしょうか。お願いします、教えてください。

トリスメギストス そんなにも答えが知りたいなら、いっそ直接セメレーに会いにゆけばよい。

ディオニュソス（振り返って）誰だ！

トリスメギストス いきなり後ろから声をかけですまぬな。

ディオニュソス ヘルメス！ ……いや、ヘルメス・トリスメギストス。

トリスメギストス ひさしぶりだな。お前が「成った」とき以来、一度も会わなかったゆえ。

ディオニュソス ヘルメスには何度か会いましたが、あなたは現れなかった。

トリスメギストス 布教に勤しんでいるお前に、迷いがなかったからだ。だが迷いに迷っている今は、私がお前に会う必要もあろう。そう、お前は私を必要としているのだ。

ディオニュソス それはどういう……

トリスメギストス お前が、死んだ母親に会うべき境遇にあるというだ。

ディオニュソス たしかに私は母に会いたいと思っています。ですが、その事とあなたの現出とが、どういう関係を持つのでしょうか。

トリスメギストス 私がその名のとおり「創造、存在、虚無」あるいは「天上、地上、地下」の三世界を司る、トリスメギストス（三倍も偉大な存在）であることは承知しているな。

ディオニュソス はい。

トリスメギストス そして私は、こと地下の冥界に関しては、プシュコポンポス（魂の導き手）の役割を担っておる。分かりやすく言えば、霊の案内役じゃ。ということは、冥府の死者に会うなら、私に導かれるに如くはないことになる。

ディオニュソス それであなたが私に「直接母に会いにゆけばよい」と。

トリスメギストス それが一番よいのではないか。

ディオニュソス もちろんそうですが、でも本当に、そんなことが出来るのですか？

トリスメギストス むしろ、わしに出来ないと思うのか？

ディオニュソス あ、いえ、あなたに出来ないことがあるとは思えません。となれば、あなたにお任せすれば、私は地下にあるという冥府に行くことが出来るのですね。

トリスメギストス とりあえず入り口まで導いてやろう。その先からは、わしがいなくとも何とかすることが出来るだろうからな。

ディオニュソス は……はあ。

トリスメギストス それと信者たちのことも心配するな。さっきヘルメスの姿でシレノスに会ってきた。そして「しばらく信者たちのことを頼む。ディオニュソスはしばらく姿を消すから」と伝えておいた。

ディオニュソス お気遣いに感謝します。

トリスメギストス では行こう、冥府の入り口はレルネーという場所にある。

レルネーの底なし沼

夜が明けている。ペロポネス半島の北部にあるレルネー。そこは辺り一面が沼沢地であったが、その沼の一つに水面が真っ黒なものがある。そここそが冥府への入り口である。

かかる沼の周りには林があり、その木の一本に、とある若者が一人もたれかかっているのが見える。彼は、豎琴を持った詩人オルフェウスである。ヘルメス・トリスメギストスとディオニュソスは、そこへ空から降りる形で登場する。

トリスメギストス（オルフェウスを見て）おお、ちゃんと待っていたのだな。

オルフェウス 昨日あなたに言われたとおりにしていました。その横におられる御仁は？

トリスメギストス ディオニュソス神だ。トラキア育ちのお前も、フリギアで活躍していた、この神の名前は知っておるじゃろう。

オルフェウス ディオニュソス神……知っています。ずいぶん変わった祭を広めているという神さまですね。

ディオニュソス（トリスメギストスに）この方はどなたでしょう？

トリスメギストス オルフェウスという名の人間だ。しかし人間といっても、あのアポロンから豎琴を贈られるほど、神に近いところにいる人間だ。この者の歌声は、神々をも魅了する力を持っている。

ディオニュソス そのオルフェウスが、どうしてここにいるのです？

トリスメギストス お前と目的を同じくしているからじゃ。お前は冥府に降って母親に会いに行こうとしているが、オルフェウスは冥府で妻に会おうとしている。

ディオニュソス 妻に……

トリスメギストス そしてわしには分かる。お前たち二人は、互いに助け合うことによって、目標の達成率を、何倍にも高めあうことが出来ると。だからわしは、人間としては例外的にオルフェウスの前に姿を現わし、昨夜から彼を、この場所に待機させておいたのじゃ。

ディオニュソス 道連れということですね。

オルフェウス 道連れ……

トリスメギストス では今こそ、冥府への入り口を開くことにしよう。

〔ヘルメス・トリスメギストスが、自身の杖を黒い水面に投げる。すると渦が生じて一つの穴となる。穴の中には、水で出来た階段が見える〕

オルフェウス すごい……

トリスメギストス この沼は、いわゆる底なし沼でな。底がない代わりに、ハデス（冥府）までつながっておるのだ。

ディオニュソス ハデスまでですか。

トリスメギストス そう。我々はこの穴を通して冥府に行くことができる。では行くと

しよう。二人とも、もう気持ちは出来ておるだろう。

ディオニュソス、オルフェウス はい。

戯曲ディオニュソス 二人の母Ⅱ

著 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
